

設建設に伴つもので、主な検出遺構は、古墳時代中・後期の土坑、古墳時代中期の竪穴状遺構などである。

木簡は、集落をはずれた西よりの谷状を呈する旧表土層から一点

出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「□□羌斗

(137) × 25 × 5 081

墨痕はすべて残存していないが、文字の跡が浮き上がっている。

一 文字目は「四」の可能性もある。

一 文字の判読・写真撮影については田中一穂氏にお願いした。

9 関係文献

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団『北陸新幹線
関係発掘調査報告書IV 大角地遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書一
七三、二〇〇七年)



(山岸洋二)

新潟・窪田遺跡

くばた

所在地 新潟県村上市南田中字窪田

調査期間 二〇〇六年(平18)四月~一二月

発掘機関 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・国際航業株

調査担当者 前川雅夫

遺跡の種類 集落跡

遺跡の年代 八世紀・一二世紀~一四世紀・一七世紀~一八世

紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

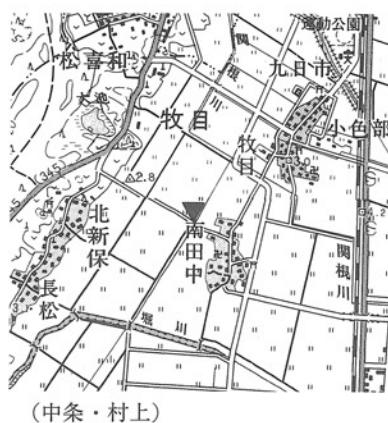
窪田遺跡は越後平野の北部、荒川右岸の沖積微高地に立地する。

調査の結果、一七世紀~一八世紀を中心とする河川

護岸施設や漁撈施設、一二

世紀後半~一四世紀前半の
集落、八世紀を中心とする
集落をそれぞれ検出した。

木簡は、中世から近世に
かけて存在した河川SR一
から五点、中世の井戸(S



(中条・村上)

E五一一) から一一点、計七点出土した。SR一は最大幅17m深さ
 一・四m（標高マイナス一・一m）を測り、調査区内で長さ六一mに
 わたって検出した。河川内では一六〇〇本もの杭を用いた護岸を大
 きく三条確認した。川上にあたる調査区東側には杭列を狭くし、川
 底（五×一〇mの範囲）に石を敷き詰めたところがあり、その中心に
 は四つ手綱やコドなどの漁撈施設に伴う杭（エビス杭）二本も検出
 されている。SR一から出土した木簡(1)～(5)の内、(1)(2)(5)は漁撈施
 設内の埋土からの出土である。SE五一二は長径六九cm深さ一七
 四cmの素掘りの井戸で、埋土中位から(6)が表を上に、(7)が立てられ
 た状態で出土した。なお、SE五一二からは漆器稜椀や田下駄など
 も出土している。

8 木簡の釦文・内容

SR一

- (1) 「
 □ 奉 □ 大日如来祕密供諸願成就□
 瑞 海 敬 □
 「
 (パン)(カーヘ)
 (78)×21×2 019
 180×75×23 061

七月□□

(花押)」 316×108×4 061

七月□□

SR一

(7)

「ハ、の□□□ひハ
 リ

七月六日

(花押)」 316×98×4 061

(6) 「ハ、の□□□ひハ
 なりこれは□□□かり
 たらひと□□あるべく候

○五一二

(5) 「久」

283×70×27 061

(4) 「銀将」

30×25×11 061

(1)は祈願札である。上端は山形に作り、下端に向けて狭まる。表
 面下半にわずかではあるが墨痕部分の盛り上がりを確認できる。こ
 のことから祈願札がそれほど長い期間でないにせよ一定期間風雨や
 雪に曝されやすい状況にあったと推測される。一文字目の梵字は観
 (ア)の可能性が高い。スギ材。
 (2)は箇状の板材に梵字二字が墨書きされていることから呪符と考え
 「松」

られる。スギ材。

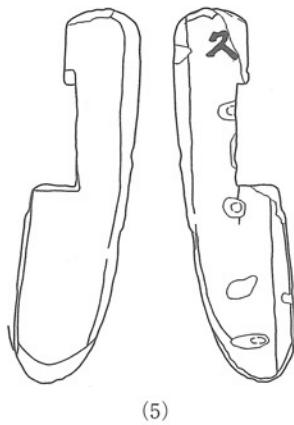
(3)は裏面に墨書がある舟形で、底面から舳先にかけて溝が削り込まれている。スギ材。(4)は将棋の駒。材はニシキギ属。(5)は鍬の欠損品で、裏面に墨書がある。

(6)と(7)は本来、同一個体の折敷の底板であった。片面のみ調整し、もう一面はワリ／ママ。(6)はワリ／ママの面の一部を平滑に調整し、(7)は調整ずみの面に墨書された。(6)の六ヵ所の穿孔、(7)の五ヵ所の穿孔と一ヵ所の桟綴じ皮は転用前の痕跡である。スギ材。

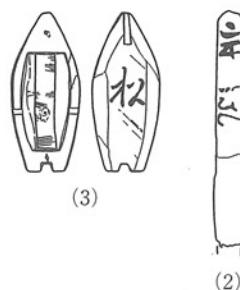
9 関係文献

新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXIII 塩田遺跡I』(新潟県埋蔵文化財報告書一七六、二〇〇七年)

(木村雄司)



(5)



(3)



(2)



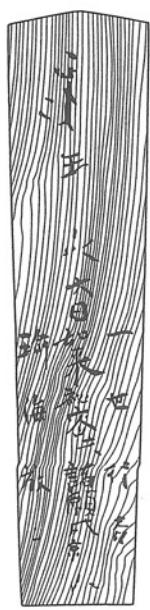
(4)



(7)



(6)



(1)